

市の起源

井本英一*

現在イランのテヘラン市の南部にあるグランド・バーザールは、中近東屈指のバーザールである。貴金属宝石、衣服、カーペット、毛皮、食料、香辛料、薬草、香草、日用品などの問屋（現在は小売りもする）が区画ごとにかたまって喧騒の中で商売をしている。

バーザールは屋根で覆われているので空を仰ぐことはできないが、左右に道が別かれる辻の部分はチャハール・スー（四方向の場所の意、バーザールの別名）といわれ八角形の広場になっており、丸天井の中央に1メートルほどの穴が開けてあるのでそこを通過して日光が射し込んでくる。バーザールにはこのような広場があちこちにある。日光の束の中に微細な土ぼこりが上昇するのが見え幻想的である。

バーザールの北側にブーザルジョメヘリー通りが東西に走り、その北にはカージャール朝時代（1796-1925）の王宮がある。今は観光名所になっているが、その当時は王宮と市場が接近していたことが分かる。ブーザルジョメヘリー大通りは当時は空堀であった。テヘラン市はアルボルズ山脈の麓に位置しており、街全体が南北に延びる傾斜地の上にある。そこで平城とはいえ王都の周囲に水堀を繞らすことはできなかった。王都の周囲にはいくつかの都門が残っている。ただの地名として残っているものも多い。

バーザールに面した都門は良好に保存され、現在も人や車が通っている。カージャール朝時代、イラン各地方の都市から産物を運ぶキャラバン（隊商）が未明に堀に達すると、都門にたむろする番人が跳ね橋を降ろした。隊商は

*本学文学部

キーワード：境界，川，山麓

春夏秋は昼間の暑さを避けて日没から出発し夜中に旅をした。盗賊の襲撃からも被害は少なくて済んだ。隊商は都門の周辺に荷を降ろし通関手続きをした。王宮の傍に税関があったが、現在もバーザールの輸出・輸入の通関手続きをしている。

都内から資本のある商人が隊商がもたらした商品をあさった。大市あるいは朝市といわれる卸商の市で、このあと都内に運んだ商品を小売り商が選び、正午の相図と共に市が開かれ、日没の相図と共に市が閉まった。朝市と昼市という区分はユーラシア全体にわたって行われた形式で、それぞれの地域で本来の意味から離れて発展した。李朝末期の朝鮮の歳時記である柳得恭『京都雑誌』の市舗の項に、買い物客は朝は梨峴と昭義門外に集まり昼は鐘路街に集まるとある（洪錫謨他著、姜在彦訳注『朝鮮歳時記』平凡社、1971年、263頁）。テヘランのグランド・バーザールは巨大化し塵埃にまみれているが、発生当初は振り売りの青空市場であった。隊商は都の却商が集めた物産を新たに積み込み、次の目的に向かった。

唐の長安には九つの市があり、その位置は城の西北部の雍門ようもんと横門こうもんに近接した場所であった。うち三つの市は横門大街の東にあって東市と呼ばれ、残りの六つの市は横門大街の西にあって西市と呼ばれた。市は正午に開き太鼓を300回打って人を集め、日没の前の七刻、鉦を300回打って人を解散させた（西嶋定生編『奈良・平安の都と長安』小学館、1983年、17、150、254-255頁）。中国でも市は都門で早朝開かれ内城の商人が買った。小市は正午に開き日没前に閉じた。雍門や横門は都城の西北の門で、中国においても乾の方角は祖霊が去来する方角であった。横門を入れて南に走る大通りの左右に市が発展したわけであるが、発生当初は青空市場であった。いずれ述べることになるが、市は祖霊とも交渉する場であった。東市と西市のことが古い文化には見られる。この区分は上社と下社と同じ形式によるもので、祖霊と人間の交渉、交換による死と再生を象徴する。朝市と昼市の区分は一見卸売りと小売りのようであるが、朝市では市神を祭るので古くは別の意味ももっていた。

市の起源

テヘランは前述したように、都門は崩壊し名前だけが残っている場所が多い。テヘランから古都レイ、聖都コム、イスファハン、シーラーズに通ずる幹線道路には、シャー・アブドル・アジーム門から出発した。シャー・アブドル・アジームはレイの南郊に位置する巡礼地で、カージャール朝のナーセル・ウッディーン・シャーやホメイニー師の宗教革命で滅びたパハラヴィー朝の創始者レザー・シャーや飛行機事故で死亡した王子シャープール・アリー・レザーの廟がある。

因みにレザー・シャー廟は、革命後は巡礼者用の便所に使われた。聖者シャーザーデ・アブドル・アジームの聖廟や王たちの廟の周辺は幹線道路と迷路からなるバーザールから成っている。ここも霊廟とバーザールが近接している。巡礼者はお土産を買って帰るのであるが、もとは違っていた。日本でも社寺の門前市に関して優れた分析がなされている。神社や寺院の門前も神仏に近い所だったので、新しく市の立つ場所になった（網野善彦文、司修絵『河原にできた中世の町』岩波書店、1988年、48頁）。

テヘランのグランド・バーザールの東に、かつてはシャー・アブドル・アジーム門があった。今はダルヴァーゼ（門）という地名で残り、トラックや長距離バスの発着場にもなっている。テヘランからレイ、シャー・アブドル・アジーム、コムを経てイスファハン、シーラーズに通ずる幹線の出発点である。昔はここには馬市があった。

イスファハンのハジ・ババは立身出世の志を立て故郷をあとにするが、途中イラン東北部に住むトルコマン人に襲われて捕虜にされる。しかし彼はトルコマンを逃れ、ホラサン州の首都メシェッドからテヘランに帰った。ハジ・ババはテヘランにはホラサン門からは入らずにシャー・アブドル・アジーム門から入った。朝早く城門に着いたが、ちょうど門は開いたばかりであった。ハジ・ババはさっそく馬市に行って乗ってきた馬を売りに出した。馬商は馬を見てけちをつけた。この馬は老い込んでいて歯がすり減っており、脚の下部に白い部分があり顔には白の斑があった。彼は馬商のいい値で馬を売り払い、その金で衣料のバーザールで衣服一式を買い、めかし込んで街に入

った (J.モーリア『ハジババの冒険』1, 岡崎正孝他訳, 平凡社, 1984年, 85頁)。

アジア全域で脚の根元の白い俗に白足袋をはいたと形容される馬や牛は不吉とされた。中国でも日本でも大葬の柩を曳く黒牛はこの種の牛であった。愛犬家は四つ目であったり白足袋をはいた犬は避ける。日本神話では、天照大神が神聖な機織りの部屋で布を織っていると、スサノヲノミコトが斑の馬の皮を逆剥さかはぎにし屋根に穴を開けて投げ落とした。大神は驚いて梭で身を突いて死に、天岩屋戸に隠ってしまった。白足袋をはいた黒牛といい斑の馬といい、生の世界と死の世界を表象したために忌まれたのである。メシエッドからホラサン街道を通過するのはテヘランの東に位置するホラサン門であったが、大きなバーザールがなかったのかも知れない。また馬市のいいのが見付からなかったのかも知れない。あるいは、スンナ派のトルコマン人の世界からシーア派のイラン人の世界に入るとき、別の門から入るのは、イラン人の感覚では不浄の世界から浄の世界に参入するときの方違えの一種であったとも考えられる。

高句麗の温達は家が貧しく、乞食をして盲目の母を養っていた。人々は彼のことをアホの温達と呼んだ。王女は16歳になったとき、温達に関心を懐き王宮を出て彼の家に嫁いだ。家と土地を買いととのえた。馬を買うとき王女は、市の商人の馬を買ってはならない。国の馬で病いにかかり瘦せて見放されたのを選んで買うようにと温達にいった。温達はこの馬を買って飼育し、それによって高句麗王が催す3月3日の楽浪の丘での狩猟に参加した。彼の獲物は多く、彼を凌ぐ者はいなかった。王は温達の名前を知りそれが王女の夫であることを知った。ときに後周を建てた武帝が遼東に出兵したとき温達は先鋒となって武勲をたてた。王は温達を迎えて貴族に列せしめた (金富軾『三国史記』卷第四十五 列伝第五 温達, 金思燁訳, 六興出版, 1981年, 776-777頁)。

仙台から馬商がもってきた立派な馬を買うことができなかつた若き日の山内一豊は、夫の急用のとき用いるようにと実家の母から贈られた金一枚を妻

市の起源

が鏡の下から取り出して与えたお蔭でそれを手に入れることができ、信長に認められ、のちに秀吉、家康に仕えて土佐二十四万石の大名となった。温達の妻の話とは直接の関係はなさそうである。ハジ・ババや温達の話にあるように、市の馬は碌な馬ではなかった。

テヘラン南部のグランド・バーザールのほかにテヘラン旧市街の数個所の都門にもバーザールが付設されていた。テヘランから西の方角に向かってカズヴィンに至りそこからタブリーズに進むか、ハマダン、ケルマンシャーに進む幹線がある。昔はカズヴィン門が立っていて、そこには女市と盗品市が開かれた。女市は広大な遊廓に発展し宗教革命前までは殷賑を極めた。表通りは泥棒市と呼ばれ^{ぞう}贓品を売る露天商が商いをした。都門や大門が穢れの場とされる典型である。

女市というのは文字通り女奴隷の市であったのかも知れない。日本の飛鳥時代と違って中国唐代の東市・西市では女は買い物をしなかった。1970年代のモロッコの部族社会の市場は女は中に入れなかった。女は同じ村の男にお金を渡して肉や野菜を買ってきてもらい、それを入口で受け取って帰っていた。その後老女は市に入るようになったが、男の視線を避けるときは面被いを口にくわえて身体を隠した。テヘランのグランド・バーザールは、女はチャードルで顔と身体を被えば自由に買物ができる。しかしカージャール朝時代のグランド・バーザールの写真を見ると通行人は男一色である（ジャアファル・シャハリ『昔のテヘラン』全五巻、テヘラン、1992年の諸所にカージャール朝時代の写真がある）。市での交換は異界の男と行われたので男が中心になったのであろう。また市神を祭るのは今では女の仕事の観があるが、古くは男によって行われたのであろう。

グランド・バーザールの薬草、香辛料区画の入口はサブゼ・メイダーン（薬草広場）と呼ばれる。イスラム暦1月10日（アーシューラー）、テヘランのいくつかの行政区画を代表する三代目教主イマーム・ホセインの追悼の山車が市中を練り歩く。これらの行列がバーザールで集合するが、その場所がこの広場なのである。現在はイスラム教シーア派の追悼行列になっている

が、本来は十日正月に行われた死と再生の儀礼であった。女の入る余地のない男の祭りである。バーザールの商人は例外なく男であるが、この日は特別に顔つきが殺気立っている。しかし顔と身体を被った女たちは自由に品物を漁ってバーザールの中を通行する。かつては祭りの期間中は女は足を踏み入れることができない時代があったと考えられる。女人禁制の市は、市神が女神であったことを物語る。

天地創造のとき大気の神シュウは妻である湿気の女神テフヌトの間にもうけた大地神ゲブと天空神ヌトを天と地に分離した。そこで天空神は女性、大地神は男性となった。日本神話では天照大神は女性として表象されるので古代エジプトの表象と類似しているようである。しかし天照大神は本来は男神であったが大神を祭る巫女が大神に代わって崇拜されるようになり、大神も女神とされるようになったという松村武雄らの説がある。また大国主神はオホナムチといわれたが大(オホ)地(ナ)神(ムチ)のことであるので天照大神は本来女神で大国主神と対偶をなしていたとも考えられる。

天父と地母の伝承をもつギリシア文化を背景にもつヘロドトスにとっては、エジプト文化はさかさまの文化であったに違いない。彼は『歴史』(松平千秋訳、岩波文庫他)の中で次のようにいっている。エジプト人はこの国独特の風土と他の河川と性格を異にする川とに相応じたかの如く、殆どあらゆる点で他民族とは正反対の風習をもつようになった。例えば女は市場へ出かけて商いをするのに、男は家にいて機織りをする。荷物を運ぶのに男は頭に載せ、女は肩に担う。女は立って小便し男はしゃがんでする。排便は屋内ですが、食事は戸外の路上です。女は決して聖職には就かない。神が男性であっても女性であっても祭司の役を務めるのは男である(2.35)。

古代エジプトでは男の祭司だけしか存在しなかったもので、市では女しか商いをしなかったというヘロドトスのことばは奇異である。市神が存在しなかった観がある。もし市神が存在しそれを祭らなければならないのなら、男の祭司にそれを任せたのであろう。女はただ商いに従事したのであろう。エジプトでは市を穢れの場所としたので、それは都門の傍に設けられていたこと

市の起源

がうかがえる。エジプト王ファラオの意味は高い門で、巨大建築である王宮の入口にある大門のことであった。日本の天子を御門^{みかど}と呼んだのと同じ発想である。テヘランのカージャール朝王宮の壮大な都門を出た所にバーザールがあるのは何ら不思議な現象ではないのである。社寺の門前市と同じ構造である。今でこそバーザールの商品は金銭で交換するが、貨幣経済以前は物々交換であった。交換に従事する者は互いに相手を異人と見たであろう。境界は聖性を帯びた穢れ^{けがれ}の場であったので、神聖な王の住む王宮や神殿の門前で、後世では蔑視されるようになった商い、男女の物色、売淫が行われるようになった。

紀元2世紀ごろのアッティカのストアポイキレ（彩画館）と呼ばれる列柱館の近くにはアゴラ（市場）の神ヘルメスの青銅像が立っており、傍に記念門があった。近辺には天空女神（アフロディテ・ウラニア）¹の聖所もあった（パウサニアス『ギリシア案内記』上、馬場恵二訳、岩波文庫、1991年、75-76頁）。この市では市神であるヘルメスを祭るほかに天空女神も祭っていた。地母神アフロディテのほかに天空神アフロディテもいた。記念門はそびえ立つヘファイストス神殿複合の北部に属するもので、アゴラはその北にあったことになる。市がテヘランのグランド・バーザールのように王宮の南にある場合は南部イランの大都市群と結ぶ幹線のためにそうなったとしか考えられないが、本来は北あるいは北西に市はあったと思われる。アゴラには常設建造物の基礎部はないから露天市であった。

フランスのパリの蚤の市は有名である。恐らくここで扱う古物や古着が蚤がわくような感じを与えるために呼ばれるようになったのであろう。蚤の市もパリの北部にあるクリニャンクール門とサン・トゥアン門の間の路上で開かれる露天市である。パリの北郊のサン・ドゥニは、パリの初代司教聖ドゥニの墓が5世紀につくられ、以後その上に修道院が建てられて聖地となった場所であるが、パリでもっとも古い市がこの修道院の門前で開かれた（阿部謹也『中世の窓から』朝日新聞社、1981年、222頁）。中世ではしばしば処刑が行われた市門や墓地において市が開かれたという普遍的な特徴がある。

韓国の首都ソウルの代表的市場は南大門と東大門の市である。両者はそれぞれの専門市場が集合したもので卸と小売りをする。都門と市との歴史的関係は韓国それなりの説明があると思うが、東大門が南方の釜山に通じ南大門が北方の義州に通じる幹線の発着地点であるので、思い半ばに過ぎる。現在は常設店舗、仮設店舗、露天商らが入り混り迷路の観を呈するが、これは本来のバーザールに近い。早朝は卸売り、昼前からは小売り、あるいは昼間は小売り、夜間は卸売りとは区分されるが、古い城門の前での商いの様子を彷彿させる。東大門市場には屋根付きの二階建てアーケードの形式をとったパッサージもある。専門店群の一つに黄鶴洞市場があり、蚤の市と呼ばれ古物が扱われる。

中国では市は伝統的な都市計画では都城の北部に設定されたが、元の大都は二つの地域に分かれていた。一つは皇城の北にある鐘楼、鼓楼の周辺である。もう一つは皇城の西にある順承門内の羊市角頭、略して羊角市である。角頭というのは東西南北、往来の人烟湊集する所という。羊市は羊の市であるが他に馬市、牛市、駱駝市、驢騾市のような家畜市があった（陳高華『元の大都』佐竹靖彦訳、中公新書、1984年、96頁）。

唐の長安の東市と西市は、都城の北部の西半分にあった。大都の市もこれと同じ形式であったが北と西の門の二つに分かれて市が設けられたのである。前述したように、祖霊や異人は西北の方角から人間界に入ってくるという古来の信仰があったためである。唐代の波斯人、元代の色目人が西北の方角から長安や大都に入ったのでこれらの外国人の便を考えて西北に市を設けたのではない。市は鐘楼から正午を知らせる相図が送られてくると開かれ、日没を知らせる相図が送られてくると閉じられた。人の集まる所であるので鐘鼓で時を知らせたのであるが、時間や時刻は天体に所属するもので人間のつくり出したものではないことは太古から知られていた。そこで鐘楼や鼓楼も市と同じようにあの世との境界に建てられたのである。社寺の拝所で拍手やガラガラなどで音をつくり出して神仏を呼び出すように、境界では音が聞かれた。

市の起源

1981年ノーベル文学賞を受賞したエリ阿斯・カネッティは、その著作の中でもっとも多く読まれている『マラケシュの声』（ミュンヘン、1968年、岩田行一訳、法政大学出版局、1973年）の中でマラケシュの赤い城壁の前の広場で開かれる駱駝市とそれにつづくスーク（アラビア語で市場、バーザールのこと）の様子を活写している。駱駝市はバブ・ル・カミース（木曜の門）という城門の前で開かれ驢馬の売買もなされる。城門の市で到着者と出発者が砂漠の船である駱駝を処分し調達する。毎週木曜の午前中で商いは終了する。駱駝市はスークの一つでそれにつづいて同業種の商品を売る露店や商店が20店ないし30店あるいはもっと多く塊になり、びっしりくっついて並ぶ。つまり専門店街になっていて香辛料、じゅうたん、金細工、皮革その他の日用品が欲しいときはその区画に行けば何でも手に入る（7-28頁）。

マラケシュのスークは全体が木曜だけの定期市なのか駱駝市だけがそうなのかははっきりしないが（多分後者であろう）、店構えが始まると毎日開くことになる。パリの蚤の市は露店であるので定期市である。マラケシュはモロッコという国名の起源になった古都で人口は30万あるので、他の中近東・アフリカのバーザールと同じように専門店街が集合した形をとっている。大都市の場合は市内に専門店街が散在するが、バーザールはその前段階である。現代の百貨店は規模と風格においてバーザールにはるかに及ばない。

17世紀半ばから19世紀末まで清朝の必要物資調達のため李氏朝鮮と清朝の国境の三か所で開市と呼ばれる辺境貿易があった。特に活況を呈したのが朝鮮東北端の会寧と慶源における開市であった。両開市は旧暦11月から翌年1月にかけて開催された。開場日は正午に半鐘を鳴らして知らせた。多くの商人は市場に駆け集まり、民衆がこれに次いで群集し、先を争って商品を手に入れようとした（寺内威太郎「極東の辺境貿易」『東西交渉』18号、井草出版、1986年、11-12頁）。

この開市は時代も新しく異人同士が集まって交易した昔の面影を残すところは少いが、正午の鐘の音を相図に一斉に商売が始まったのは、昔の神の音ずれや音ないの名残と考えられる。この市では群衆が商品を手に入れようと

してもみ合ったという。古くは境界において神のもたらず賜物をわれ勝ちに入手しようとする争いであった。開市が定期市であったことも神の節目節目に來訪していた時代の名残であろう。ことに旧曆の正月の前二か月から市を開き正月が過ぎて市を閉じたのを見ると正月用品を整えるために行われた市の感を深くするが、それは俗用であって実際は祖霊を迎えて彼らのもたらず賜物と交換するのが聖なる目的であった。

ヘロドトスはその『歴史』の冒頭で興味深いことを述べている。フェニキア人はもとはペルシア湾やアラビア海にいたが、地中海に移ってきていわゆるフェニキアに定住するようになった。彼らは遠洋航海に乗り出しエジプトやアッシリアの貨物を運んで各地を廻って海岸に商品を降ろして商売をしたが、当時ギリシアでもっとも強大な国といわれたアルゴス（ペロポネソス半島にあった）にもきて商品を売りさばいた。5～6日して商品も大部分売り切れたころ女たちが大勢海岸にやってきて残りの商品を漁った。女たちの中には王女イオもいた。女たちは船尾のあたりで商品を買っていたがフェニキア人は彼女らに襲いかかった。大半の女たちは逃れたがイオは何人かの女たちと共に捕えられ船に乗せられてエジプトに連れてゆかれた（1.1）。

ギリシア人は異邦人^{バルバロイ}と接触して商売をしたが、市は海岸に設けられた。清朝と李氏朝鮮の開市は鴨緑江の中洲や豆満江の川原で行われた。ギリシア人と異邦人の間の市は定期市ではなく随意的なものだった。フェニキア人は男ばかりで商売した。ギリシア人の客も最初の数回は男だけが買い物をした。女たちは男たちの買い残したものを漁った。この形式が市の商売の古い形式だったと考えられる。男同士の間で交換を済ませたあと、來訪者と土地の女の間で聖婚が行われたのであろう。來訪者はのちには女たちを連れ去り、次の寄航地で女の市を開いて売りさばいたのであろう。

ヘロドトス冒頭の話はこのような慣習にもとづいたものであろう。古代近東ではこのような場合の聖婚には未婚の王女が参加した。神に仕える斎王と同じものが古代近東にはいくつか記録されている。J.G.フレイザーによると、ローマの場合、北に位置したエトルリアとの境界にあたるソラクテ山の

市の起源

フェロニア女神の神殿で火渡りが行われ、ローマ人とエトルリア人の間で市が立った (J.G.フレイザー『美男バルドル』II, ロンドン, 1914年, 14頁)。火や水は境界の存在で, これを渡ることによって言語も人種も全く別のローマ人とエトルリア人の通過儀礼が完了した。同時に女神の神殿では物資の交換と聖婚が行われた。日本の市と女性に関する論考は笹本正治『辻の世界』名著出版, 1991年, 15「市と女性」, 241-256頁に詳しい。

境界で開かれる市には男女の市神がしばしば現れる。ギリシアの市神の一つにヘルメス神があった。ヘルメスは本来は陸と海の境にある暗礁あるいは磯の岩の神格化した神で, 顔のついた石の柱で表象された。ヘルメスは神となると1本の杖あるいは木柱でも表象された。杖には2匹の蛇がからみついていた。ヘルメスは境界石の神格化したものであり商業の神でもあった。商業学校の校章には2匹の蛇がからんだヘルメスの杖を図案化したものが多い。

中世の説話集である『宇治拾遺物語』にいう。昔, 山科街道の四の宮川原という所に袖くらべという商人が集まる場所があった。そのあたりに一人の身分の卑しい者が住んでいた。男は地藏菩薩を一体つくったが眼を入れることもせず, 部屋の奥にしまったまま忘れてしまい3~4年たった。ある夜男は夢を見る。家の前で大声で「地藏さん」と呼ぶ声がある。すると「何の用事ですか」と応える声がある。「明日, 帝釈天が地藏会をなさるので参加されますか」というと「まだ目が見えないので参加しようがありません」と応える。男は驚いて目が覚め, 部屋の奥にしまっておいた地藏を思い出し, とり出して急いで眼をお入れしたということだ (巻五の一, 四宮河原地蔵事)。

山科の街道筋は京都と滋賀の境界上を走る道で古来商人が集まる市があった。袖くらべという地名は注釈がいうように商人が相手の袖の中に手を入れて値段を交渉する習慣——これに似た行為は世界のあちこちで現在も見られる——に由来したのかも知れない。あるいは商品を代表する衣料を較べ合っ
て商取引を行うことを象徴する市場であったとも考えられる。四宮河原で市が立ったのであるが, 四の宮と読めば注にあるようにそれに応じた地名解釈ができる。四宮をシクあるいはシュクの翻字と見ると夙川を想起させる。夙

の者と呼ばれた人たちが市で雑役に従事していたのではないかと考えられる。

この川原には境界石が安置された。それはギリシアのヘルメス神に相当する地蔵菩薩であった。まだ仏像にならない自然石でもよかったのである。仏教説話としての一つの型にそって話が形成されたと思われる。境界石や西アジア・北アフリカに多く見られる戦勝記念碑は山頂（峠）、山腹、山麓、川原、湖辺、海辺、神殿、市に立てられた。これらの地点は境界であると同時に多くの旅行者や軍旅が休憩する場所で、人々に王者の功績を誇示する効果をもつとされた。戦勝記念碑は一方では奉納絵馬に相当し、両方とも境界に安置するものであった。

安宇植編訳『アリラン峠の旅人たち』（平凡社、1982年）は朝鮮民衆の世界の聞き書きで香り高い記録である。開巻第一章は「市を渡り歩く担い商人」で、その中にまず花開における市のことが出てくる。韓国南部の全羅道と慶尚道の境界を分ける智異山の山麓まで貫通している道路と、求礼へ向かう道路と、河東への道路が交わる三叉路に花開は位置する。右手には慶尚南道と全羅南道を分けながら蟾津江が流れている。市は午前中で終わる。蟾津江の川原には牛市が立ち杭が何本も打ち込まれてある（19頁）。

朝鮮の行政区画の単位である道はそれぞれ独自の習俗を伝承しており、住民は互いに独立意識をもつ。このような道の境界に立つ市に担い商人がやってくる。発生的には市の商人はみな担い商人であった。興味があるのは川原に打ち込まれた何本かの杭である。この記録を見て私は杭は単なる牛を繋ぐ杭ではなく市神であったに違いないと思った。

西暦921年バグダートのカリフは使節団をブルガール国に派遣した。一行はバグダードを出発、中央アジアのボハラを経てカスピ海とアラル海間の平原を北上、翌年ヴォルガ河畔に近いブルガール王の野営地に到着した。一行の中にイブン・ファドラーンという人物がいた。彼は一行の中の中心的人物で『ブルガール旅行記』として知られる報告書を残している。

この書物の第5章「ルース族について」に次のような記述がある。ルース人（ロシアという語の起源）が川の港に着くと、各自がパン、肉、玉ねぎ、

市の起源

乳、酒を持って船を降り、地面に立てられた長い棒杭のある場所にゆく。その棒杭には人間の顔が彫られその周囲には小像がありそれらの像の背後には数本の長い棒杭が立っている。

彼らは持ってきた全商品をいちばん大きな像の前に供え商売がうまくゆくよう祈る。商売がうまくゆかないと小像一つ一つに贈り物を供えて祈願する。その結果商売がうまくゆくと羊や牛を殺し一部の肉を供え、残りの肉をいちばん大きな棒杭と周囲の小像に投げる。また牛や羊の頭を棒杭に引っ懸けておく（家島彦一訳注、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1968年、68-69頁）。

川原に立った人面をつけた棒は神像で市神ヘルメスであった。周囲に立つ小像やその背後の一柱一柱もみな神々の表象で主神ヘルメスの眷属であった。神々は川原に集うものであった。天照大神が天岩屋戸に隠れ世の中がまっ暗になったとき、八百万神は天の安の川原に集まって善後策を講じた。盆踊りのやぐらは古くから川原に設けられた。川原がまとまった広い空間であるからそれを利用するのではない。川原には神々や祖霊が群行して来訪したからである。十分な堤防を築く余裕もなく上流から流れてくる土砂で川床が高くなった大昔の川の川原は、人の住む場所ではなく神々が寄りつく場所であった。河原者とか河原乞食といわれて差別された芸能者が、あの世との境界の所作を演じる場所であった。

メッカのカアバ神殿は、七世紀にイスラム教が設立されイスラム教の神殿になる以前は異教の神殿であった。このカアバ神殿はユダヤ教の方舟と同じものである。神殿は涸れ川の川床に立っているので何十年振りかに豪雨があると洪水の中に立つ方舟になる。神殿は神の家と呼ばれ周囲には多くの墓があった。一神教であるイスラム教が出現する前の多神教では、主神の神殿と祖霊の墓で一つの複合をなしていた。古い時代アラブの諸部族はメッカのカアバ神殿に集合し物資を交換する市を開いた。詩人は自作の詩や伝承作品を朗唱し、芸能者は劇を演じた。カアバ神殿と盆踊りのやぐらは同じもので、いずれも盆市のような市の市神を祭ったのである。

伊勢の皇太神宮の内宮と外宮の正殿の床下中央に心御柱しんのみはしらが地中に挿してある。地上に出た柱には五色の布片が掛けられ、柱の根本には800枚の素焼きのかわらけが積んである。柱はかわらけの小山の上に立っている感じである。心御柱のことは『皇太神宮儀式帳』（延暦23年〈804〉）に見られるので非常に古い。式年遷宮ごとに秘儀のうちに安置される。御柱と800枚のかわらけの関係は、主神と800柱の眷族のそれである。発生的には五十鈴川の川原に立てられた市神とその眷族であった。現在は第二次世界大戦中空襲を受けて往時の繁盛をしのぶことはできないが、内宮と外宮をつなぐ古代の幹道の中間の小高い所に市が立った。地名として古市の名が残っており、参拝者の宿や精進落としをする遊廓などで栄えた。遊廓は女市であろう。古市は市の立地条件の一つである小高い場所にあった高市的一种であった。モンゴルの小高い高みにあるオボも、石積みの上に柱を立て色布で飾ったものである。同類であった。英国の5月1日に立てる五月柱メイ・ポールも同類でヨーロッパの古い新年の年の市に立てた市神であろう。五月柱には五色のテープを巻く所作がある。このとき柱は蛇に変身する。五月柱に蛇が巻きついた絵もあるので五月柱も市柱、ヘルメスの杖としての機能を果たしていたことが分かる。

古朝鮮（王儉朝鮮）の神話では次のようになっている。昔、桓因はその子桓雄を地上に降ろしたが、雄は部下三千を率いて太伯山の頂上の神壇樹の下に降りそこを神市と呼んだ。あるとき熊と虎が桓雄に向かって人間になりたいと願った。熊は物忌みをして女になったが、虎は物忌みができず人間になれなかった。熊女は自分と結婚してくれる人間を探したが見つからなかった。桓雄が人間に変身して結婚し壇君王儉をもうけた（一然『三国遺事』金思燁訳、朝日新聞社、1976年、54-55頁）。

神壇樹というのは石積みの祭壇に立てた樹木のことで、モンゴルのオボを想起させる。ここを神市と呼んだとあるので、ここが山頂の高市とされ天上の神々と地上の人間が交易したことが分かる。この市は女市でもあったので神と人間の女（熊女）が聖婚する場所でもあった。市で出逢った男女は歌垣で出逢った男女のことである。市が遊廓の存在を許すようになる素因をこの

市の起源

神話は内包している。神壇樹はテキストによっては神檀樹となっている。神檀樹の場合は祭壇なしの市神を表象する樹木そのものである。

熊と虎の逸話では熊だけが人間に化すことができ、桓雄と交わって壇君王儉を生んだ。虎は人間に化すことができなかった。熊も虎も古朝鮮のトーテム獣であったと考えられる。市神には二種類あり一つは生を他は死を象徴したと考えられる。王儉神話の場合、熊は生を象徴する市神で虎は死を象徴する市神であった。ある伝承では神壇樹一本になっており他の伝承では二つのトーテムになっている。別稿で論ずることにするが、中国や日本に見られた東市と西市のそれぞれの市神と古朝鮮の二つのトーテムは関係がある。内宮と外宮の心御柱はしたがって陰陽を象徴するトーテム柱であった。

保立道久「海からみた川 山からみた川」『月刊百科』（1984年5月号）に中世の市が川原に立った例を挙げている。川原は河船交通に便であったこと、川原が穢れやキヨメと深い関係をもっていたことを諸家の研究を引用して説明する。川と川原が山と海の間位置し、そこに市が立つことを論証する（25頁）。川原は何十年に一回かの洪水によって一切のものが流れ去る。所有するのにもっとも不安定な場所である。洪水による死体を安置するのが川原である。アラビアのメッカの涸れ川の川床に立つカアバ神殿は何十年に一回起きる大洪水で多くの水死者を出す、水が引いたあと死体で川床が穢れる。川原には祖霊が群行来訪する。祖霊と交易する場所である川原は穢れとキヨメの場所で、河原者と差別された者らが芸能を演じたのであった。

トーテムの女と神の子が化身した人間が神市で交會した。「常陸国風土記」久慈郡には次のような記述がある。いわゆる高^{たけち}市はここから東北二里^{みつぎ}の密筑の里にある。村には泉があり大井と呼ばれ流れ出て川になる。夏暑いときは遠近の男女がつどい遊び楽しむ。その東と南は海浜に臨み西と北は山野をひかえている。海と山の珍味は書きつくすことができない（『風土記』吉野裕訳、平凡社、1969年、29頁）。

市（イチ）の語義に諸説あるが、神に斎（イツ）くことだけに結びつけるよりも衢（チマタ）、道（ミチ）、町（マチ）などに共通して見られる「チ」

との関連性が注目される。市は共同体内部ではなく異質な生活が接触する境界としての衢に立つことからこのことがいえよう（増尾伸一郎「農耕神事から歌舞遊宴へ——『常陸国風土記』の耀歌と神——」『えとのす』28号，1985年，53頁）。

久慈郡の高市^{たけち}は山と海の境の高みにあった。ここで山人と里人という異人どうしが交易し，異人同士の男女が交会するのが古い習俗であった。増尾もいうように，市は交易だけでなく邪霊祓除，処刑，祈雨，誅や殯宮儀礼などの場としても機能したことは『古事記』や『日本書紀』などの伝承から推察される（上掲書，53頁）。市にはあの世が口を開いた井泉があつたり祖霊が集合する川原があつた。市の位置は意識した場合そこが地上でもっとも天に近い場所であると認識された。実際は低地にあつても市は太伯山頂の神市のような高市であった。

奈良県桜井市^{おおみわ}の大神神社とその神体山である三輪山の南西に海柘榴市^{つば いち}があつた。この市は南北に走る山辺^{やまのべ}の道（現在の山辺の道と古代の道がぴったり合うかどうかは別問題である）とその下を走る上つ道と東西に走る横大路が交わる地点に位置し，大和川の本流である初瀬川の舟着き場に近くにあつた。初瀬川の上流^{はせ}に長谷観音の霊場が開けるとそちらの参詣者で賑わつた。山辺の道に沿って大神神社をはじめとして，箸墓，桧原神社，景行天皇陵，崇神天皇陵，長岳寺^{いそのかみ}，石上神宮^{わ に した}，和爾下神社，円照寺などの古墳・神社・仏寺が存在する。下つ道と上つ道が延長した山田道が西に折れて交わるあたりが古代の軽の地で，今の橿原市大軽町あたりと考えられている。海柘榴市が飛鳥の東北に位置するのに対し軽の地に栄えた軽の市は飛鳥の南西に位置し，それぞれ重要なちまたを占めた。

これら二つの古代の市には多くの共通点があつた。市は重要な道路の交差点にあつた。山辺の道にことに多く残っている古墳や社寺は，道がこの世とあの世の境界であることを表わしていた。軽の市には近くには見瀬丸山古墳，欽明天皇陵，宣化天皇陵，新沢千塚，久米寺，牽牛子塚古墳，マルコ山古墳など多くの古墳が存在し，大和川に流入する高取川がそばを流れていた。両

市の起源

方の市では歌垣が行われ、刑も執行された。もう一つの特長はそばに川があることであった。市の荷物の集散のためだけではなく、川はこの世とあの世の境界を形成するものと考えられたふしがある。

市は地上につくったあの世である古墳や社寺と隣接していたからである。あの世とこの世の境界で交易が行われたことをこの事実は物語るのである。刑を執行するのは、市の場合から死者をあの世に送り出したのであった。境界やちまたは、異界からの来訪者である異人が出会う場であった。貨幣経済以前は異人間での物々交換が行われた。折口信夫の説いた山人と里人の間の交易はこれである。交換の中には男女の出会いもあった。柿本人麻呂が妻を得たのは軽の地のこのような場であった。

川はあの世とこの世の間にあるものと見なされた。対岸があの世である場合もあったし、水源までさかのぼり、沢の奥に別世界を訪ねたり、水源にあるトンネルに入りしばらくすると異界に出たりする。対岸の異界には橋を渡って達することができると思われた。飯島吉晴「村境と橋」『自然と文化 特集 橋』（日本ナショナルトラスト、1984年）によると、橋は岸に渡すだけの場ではなく、大橋の両詰には必ずあき地があって、かつてはそこに番小屋、高札場、床見世などがあり、大道芸人が出沒し市が立つなど商業や芸能を通してさまざまな情報が行きかい、また新しいもの異風なものが創出される創造的で活気にあふれた無縁の空間でもあった（41頁）。異界の男女の出会いは、橋が架っている場合は橋の中央で行われた。

市は世界のいくつかの地域では虹の両端に立つと伝えられている。これは物理的にありえないことであるが、その根底には天と地の間に架かった橋の両端にも市が立つという観念がある。古朝鮮（王儉朝鮮）の伝説にいう。昔、桓因（帝釈のこと）はその子桓雄に天の神器を三つ与え人間世界に降らせた。桓雄は部下三千を率いて太伯山の頂上の神壇樹の下に降りてきてそこを神市と呼び、穀・命・病・刑・善・悪をつかさどった（一然『三国遺事』、54頁）。

日本神話で天孫が天の浮き橋つまり虹を渡って降りてきたように、桓雄一行も虹を伝って降りてきた。虹の片端が太伯山の山頂で、そこに神の市が立

ったのである。もう一つの片端は天上にあり、そこにも当然のことながら神市があった。

飯島、上掲書によると、東南アジアや南海の諸民族の多くは虹を神霊または死霊の渡る橋と信じており、これを指すと指が腐るといわれている（40頁）。日本の古代から中世にかけても虹が立つ所に市を立てなければならないという考え方があった。中世の貴族の日記にも、虹が立った所に市を立てたとある。虹が立つとそこが神の世界と人間の世界の境界になり、神に物を捧げそれを交換する市を開かなければならないと考えた。河原や中洲^{なかつ}や浜なども虹の立った所と同じような意味をもった場所であった（網野善彦文 司修絵、前掲書、8-9、48、53頁）。

飛鳥京の東北に位置する大神神社と三輪山、その南西にあった海柘榴市について考えてみたい。三輪地方は、神武天皇と同じようにハックニシラススメラミコトの称号をもつ崇神天皇と深い関係をもっている。この地域にある海柘榴市は、虹の橋を通過して降下してきた天孫族の開いたものと観念されたであろう。天孫族は最初は北九州あるいは南九州に降下するが、大和へ東遷して定住すると神話の舞台も大和に移したと考えられる。虹の橋の片端が海柘榴市であった。三輪の地ではもう一つの片端は高天原にあった。三輪山は大国主神の幸魂^{さきみたま}・奇魂^{くしみたま}を頂上^{こうのみや}の高宮に祭る。この魂が大物主神とされた。

三輪王朝の大王たちは、大和族が国譲りの交渉で大国主神と交わした約束どおり自分たちは政治をつかさどり、大国主神は神として祭った。大王たちは崇神天皇のおばで、蛇体の大物主神の妻となったヤマトトビモモソヒメノミコトを箸墓に祭り、三輪山と箸墓を一処二祭場とした。前者は出雲族の祖神を祭り、後者は大和族の祖を祭る。前者はジググラトの文化を伝承し、頂上に神の家をもち、後者はピラミッドの文化を伝承し墳丘内に神の家をもつ。もう一人のハックニシラス天皇である神武天皇は、出雲族の祖神である大物主神の娘であるイスケヨリヒメを正妃とする。

崇神天皇のおばは大物主神の聖婚の相手であるので、一処二祭場は出雲族と大和族の合一を象徴する。神武天皇の妃となるイスケヨリヒメは大物主神

市の起源

とセヤダタラヨリヒメとの聖婚の結果できた女性である。セヤダタラヨリヒメは奈良県生駒郡三郷町勢野に関係がある勢野田出身の玉依姫のことであろう。その間に生まれたイスケヨリヒメは出雲族の女性である。そこで神武天皇の場合にも大和族と出雲族の合一が見られる。神武天皇の場合は崇神天皇に見られた一処二祭場や市は見られない。

桓雄一行は父の桓因に三つの符印（神器）を与えられ、（虹橋を伝って）降下する。三つの符印は桓雄の降下に対する交換の対価であった。桓雄が降下した神市には神壇樹（または神檀樹）が立っていた。神壇樹なら、大きな盛り土の祭壇に植えられた樹木あるいはそこに立てられた緑の枝葉のついた生木であろう。神檀樹なら樹木の種類を指す。海柘榴市には椿の巨木が目印として立っていたであろう。東西の市に分かれていたとすると二本の椿があった。これらの樹木や柱は神が降臨する依り代で、市神として崇拝されるものであった。桓雄は三千の部下を率いて降りてきたというから、地上から見るとあの世の三千の靈魂が神市にあふれたことになる。神市の周辺はあの世の魂の住処である墓がとりまいていたとされたであろう。

シューベルトの歌曲集『冬の旅』に収められている「菩提樹」の歌詞の出だしは、ドイツ語では「都門の前の泉のそばに一本の菩提樹が立っている」となっている。欧州の都門の前も一般化すると市場があった。都門の前には大河から水を引き入れた濠があった。濠がなければ泉があった。都門は死体を安置する場所であり処刑の場でもあった。このような環境の都門の前に一本の菩提樹が立ち泉があったのである。樹木は神の依り代であると同時に、天と地をつなぐ橋でもあった。それは古代の梯子で、一本の柱につま先が入るだけの凹みを彫み込んだものであった。

メッカのカアバ神殿は、現在は高さ13メートルほどの石を積み上げた直方体の建物で、床は地上2メートルの高さにある。神殿には移動式の梯子をもってきて入る。神殿には窓がないので入口の扉を閉めるとまっ暗である。地上2メートルほど盛り上がり、中央に50～60センチの穴があいた床はへそ石であり祭壇とされたものであった。床面から約11メートル上に平たい天井が

あり、へその緒（の血管）と呼ばれる三本の柱で支えられる。床から天井まで梯子がかけられ、あげ蓋を上げて屋根に出ることができる。梯子は現在想像するものではなく、古くは柱に足のつま先を入れる凹みをつけたものであったと思われる。

へそ石である床と梯子の複合は、祭壇とその上に立てられた柱を印象づける。神殿のそばにはザムザム泉があり、涸れることのない水を供給する。神殿は涸れ川の川床の上に立っているので、何十年に一度の大雨が降ると川が氾濫し、神殿の周囲に多くの死体が集まるようになっている。今はとり払われて整備されているが、古くはカアバ神殿の周囲には多くの預言者や聖者の墓がひしめいていた。この場所で市が開かれ芸能が演じられた。メッカのカアバ神殿は、古朝鮮の太伯山頂の神市と神木と同じ構造をとっている。カアバ神殿の位置は川床の凹んだ場所にあり、川に水が出た場合、最後まで水が残り神殿は水中に浮く方舟の観を呈する。周囲にはアラファート山のような山がある。それでも神殿の位置は他の地よりいちばん天に近いとされる。このような河原で市が開かれるのである。

奈良と京都は古くから奈良坂で結ばれていた。奈良坂から京都に向かうと市坂という京都府最南端にある木津町の大字がある。この地は『古事記』の崇神天皇条に出る四道将軍の一人である大彦命が通過した幣羅坂や『日本書紀』の平坂にあたる。平坂といえは、出雲のヨモツヒラサカを想起させる。平坂はこの世とあの世の境で、大きな境界石があった。市坂には法然がその上に座って念仏した念仏石がある。坂の途中に平坦な空間がある場所をことに祭祀空間として貴んだのであろう。この地は古代の山城国の奥津城であったに違いない。当然のことであるが、この地に市が立った。『日本書紀』によると、イザナキノミコトが平坂の大樹のもとで小便をすると大きな川になった。市に立つ木や川や市神や市石がこのような形で表されている。

アラビアのメッカの町は古くから人の住んだ町である。生活の水はアラファート山の山麓に湧出する水などを地下導管を用いて町に引き入れた。アラファート山からメッカまでは坂になっている。途中にあるカアバ神殿の周囲

市の起源

は異教時代からメッカの住民の奥津城であったにちがいない。現代でもメッカ巡礼に来てメッカの地で生を終わり、メッカの地に埋葬されることを無上の喜びと感ずる人々がいる。巡礼の時期以前に死んだ人の死体を棺に入れ、飛行機や自動車あるいはキャラバンでメッカに運んで埋葬したり改葬する人も多い。

カアバ神殿のある場所は、傾斜地の途中にあるかなり広い平坦地である。このような平坦地の河原には人ばかりでなく祖霊も集まったのである。八百万神は天の安の川原に集まった。河原に設ける盂蘭盆会のやぐらには祖霊が大挙してやってくる。この傾斜地を野といったらしい。京都の嵯峨野、化野（蓮台野）、鳥辺野は、天竜寺、大徳寺、清水寺など多数の寺院で代表される三大野であるが、発生的には古代の葬地であったと思われる。古代には原生林で覆われていたと考えられる傾斜地の中の平坦部を開いて祖先と人間の交流の広場にした。

野、原、平などの漢字をあてた和語であるノ、ハラ、ヒラ（タイラ、タイ）には古代人の地形に対する適用があった。平坂はゆるい傾斜地にある平坦部の原木を切り開き、そこを聖地としたものであった。ちょうど階段の踊り場のようなもので、ここで一服することができた。山麓に近い平坂と山頂に近い平坂があったであろう。奥津城とされ、この世とあの世の境界とされたので、そこには神社や寺が建てられる契機があった。一服する場所でもあるので峠の茶屋に類する施設や地域によっては湧水や泉があった。湧水は山肌の洞穴から湧出し、河川の水源となる。

『古事記』のヨモツヒラサカは今の出雲国のイフヤサカであるという。平坂には黄泉国とこの世をつなぐ洞穴があった。ここには川の情景があった。天の岩屋戸神話には天の安の川原が出てくるので平坂複合をよく保持している。メッカのカアバ神殿複合には一見トンネルがないようであるが、ザムザム泉の井戸がそれにあたる。この井戸の底は、アラファート山麓に湧出する水をメッカの町に流す地下導管につながっているので、トンネルはこの導管であると考えてよい。カアバ神殿は、異教時代メッカの町とアラファート山

を結ぶ坂の途中にある平坂であったことがわかる。

『日本書紀』の斉明天皇5年是歳の条に、出雲国造に命じて神の宮（意宇郡の熊野大社）を修造させた。狐がそのとき用材にする葛の先端を噛み切って逃げた。また、犬が死体の腕を言屋神社の境内で食いちぎって置いていった。これは天子の崩御の前兆といわれたとある。神社はイフヤサカすなわちヨモツヒラサカにあったことになる。平坂は葬地でもあったので死体は埋葬されたり遺棄されたりした。古代の社寺の立地はこのような地であったが、神社の立地条件は変わっていったようである。

斉明天皇は百済のために新羅西征を意図し、7年1月6日海路九州にまで出征するが、7月24日崩御する。11月7日、飛鳥川の川原で9日間殯をした。天子の遺骸は飛鳥に運ばれ、恐らくは高天原の八百万神に囲まれて^{みねたてまつり}発哀と歌舞音曲と雑戯と交換の儀が行われたであろう。殯の場が市になるという観念は近代的な発想からは不謹慎であるが、社寺の縁日の市の原型があったと考えられる。聖婚ということばで表現される男女の交会や、しばしば呪詛の対象になった女帝の強力な豊稷霊に浴さんとする行事も行われたであろう。

インドにはヒンドゥー教の神々の祭り、ジャイナ教の祭りのほかイスラム教の聖者の祭りがある。これらの祭りは寺廟そのもので行われるが、これらの寺廟と何らかの縁のあるゆかりの場所や聖なる山、河岸、湖で行なわれるメーラーという祭りがある。メーラーでは祭りの参加者を目当てに市が開かれる。参加者のための娯楽活動もある。

インドの場合、イスラム教徒のメーラーはイスラム教の聖者の祭りであるが、これらの聖者はヒンドゥー教徒にも崇拜されているのでヒンドゥー教徒にとってのメーラーでもある。イスラム教の祭日は太陰暦によるが、このようなメーラーは太陰太陽暦であるインド暦によって行われる。以上がインドの中央州（マドヤ・プラデーシュ）で行われるメーラーの概観である（古賀勝郎 解説・訳・注「北中部インドの祭り 資料と解説」『世界口承文芸研究』第6号、大阪外国語大学口承文芸研究会、1985年、151-201頁、ことに180-195頁）。

市の起源

メーラーはインドの上記の三宗教では本来の祭りと並行して行われる。それも寺廟を中心とするのではなく戸外で行われる。市が立ち見世物も催されるので、古い時代に境界で行われた市がそのまま連続して現在に至っている観がある。宗教本来の祭りが行われる寺廟はかえって新しく、教義にのっとる祭りはもっと新しい。これらの多くはメーラーにおける市の市神の祠堂から発展したものである。

メッカのカアバ神殿は、現在はいちどきに50万人が入れる広大なモスクの境内に位置し、四周を回廊で圍繞されているが、集中豪雨があると涸れ川が溢れ川床の上に建つ神殿は雨が止んだあとも当分の間池の上に浮かぶ方舟の観を呈する。川の上流にアラファート山がある。モスクの境内での種々の行事との複合はインドのメーラーのそれと同一である。メッカの場合、異教時代はメーラーそのものであったに違いない。イスラム教は犬を最大の穢れとして忌み嫌う。豪雨のあと死体がカアバ神殿の周囲に漂着するようになっているが、異教時代は恐らく犬が死体を食って死者をあの世に渡したのであろう。異教を追放し一神教をうち立てたイスラム教は、犬崇拝を否定した。

インドの場合、イランのゾロアスター教と同じように四つ目の犬が死者をあの世に導く。二匹の犬とされるが四つ目とある（『リグ・ヴェーダ讃歌』辻直四郎訳、岩波文庫、1970年、231頁）。四つ目の犬はインドのヤマ王（仏教の閻魔大王）の聖獣であり、イランのアフラ・マズダの聖獣であった。イランのゾロアスター教の祭司階級になったマゴス僧は、ペルシア人を葬るさいにその死骸を公然と鳥や犬に食いちぎらせる（ヘロドトス『歴史』1・140）。葬地には犬がつきものであったが、犬をどのように見るかは文化によって異なっていた。

海柘榴市の立地条件はインドのメーラーと同じである。初瀬川の上流には泊瀬山がありそこに長谷観音霊場が発達した。市のそばをもう一本の川である寺川が流れる。かつては少し離れた所に磐余いわれの池があった。メーラーの周辺には聖者その他の墓地があったが、海柘榴市の周辺には三輪山をはじめ多くの陵墓があった。古代にはもっと多くの墓地があったことが考えられる。

市が都門の前や堀や空堀のそばで開かれるのは、隊商が早朝そこに到着するからに違いないが、門や堀が本来もっている境界性のためとも考えられる。王宮が市の近くにあるのは、近代的王権の観点からするときわめて世俗的で不浄の感じがする。しかし境界と市の複合の中には王宮（神殿）、墓が存在するので、古代の伝承を保持する文化では何ら不自然ではない。海柘榴市も周辺の王宮、川、池、陵墓、宿駅などと共に一つの複合体を成していた。

[付記] 1994年10月1日付で私は大阪外国語大学から桃山学院大学文学部に転任することになった。翌1995年6月2日、経営学部の武田久義教授のお誘いを受け、教授の所属する研究会で「市場の話」を発表させていただいた。武田教授は私も所属する日本オリエント学会の会員であられ、シュメール・アッカド時代の経済活動にも該博な知識を有しておられる。研究会には村田晴夫、井上義祐、全在紋、谷口照三、滝澤武人先生もご出席いただき楽しい一時を過ごさせていただいた。さらに時間を見付けて「東市と西市」「刑場と市」「外来者と歌垣」などをまとめたいと思う。

The Origin of the Market

Eiichi IMOTO

The bazaar was located in front of the castle gate; the bazaar was located especially at the northwest of the castle or the city, through which ancestors used to come and go.

The bazaar was located between two worlds, the shores of a river or around shrines; they promoted trade between groups through the intermediation of the market god or gods.

Kaaba, the house of the god, of Mecca, Arabia stands on the shore of a waterless river; the market is held there.